

壁

we-are-reds

莓

---

毎日見る風景が輝いて見えた、何気ない事でもあの人の事を考えると毎日が楽しい。

と寝付けられない日もあった。

あの人の顔が見られると思う

恋は私の理性を縛りあげ正常な思考をレイプする、あの人の笑顔を見られただけで嫌なことも全部忘れられた。

手をつなぎたい、一步步彼に近づきたかった。

彼は私の存在を知らない。

笑顔で見つめてみたが気づきもしない。

私の中の彼は大きな存在であるのに彼は何故気づいてくれないの。

私の事嫌いですか？

彼への関心が強くなった。

彼女はいますか？どんな人がタイプですか？

彼と会話がしたい、そう思うようになった。

彼に近づくにはどうしたらいいのだろう。

手を振ってみた。

結果はわかっていた。

毎日顔を合わせるのに距離は縮まらない。

側にいたい。

日に日に気持ちは強くなった。

彼のことを探りたかった。

ストーカーではないと自分に言い聞かせた。

一度は思いとどまった。

彼はいつも独り。

気になってしかたがない。

いつも見る背中には哀愁さえ感じた。

私がそばにいてあげる。

そう思うようになった。

彼を放っておけない。

そんな気持ちにさえなった。

時たま見る彼の笑顔に心が満たされた。

こんなに人を好きになったのは初めてだった。

彼に会いに行くことにした。

お客と店員、定形の会話ではあったが嬉しかった。

彼とちょっと近づいた気がした。

月に何度か通った。

私の事覚えてくれたかな。

欲がでてきた。

もっと近づきたくなった。

定形では満足できなくなった。

何でもいい些細な事でも会話がしたい。

日に日に思いは強くなるばかり。

彼に話しかけてみようと決意した。

相談もした。

チャレンジしよう。

そう背中を押された。

内心不安だった。

嫌われたくない。

怖かった。

彼に声をかけた。

しかし何も言えなかった。

立ち止まった彼の顔は茫然としていた。

彼はまた歩き始めた。

もう一度声をかけた。

彼は立ち止ってくれた。

私は何も言えなかった。

怖かった。

連絡先を教えてほしい。

言えなかった。

言葉が出なかった。

帰って泣いた。

悔しかった憤りも感じた。

不安も襲ってきた。

変な人だと思われたかな。

声かけなければよかったと後悔をした。

会

---

彼とばったり会った。

何も言われなかった。

内心ドキドキだった。

しずかに彼は通り過ぎた。

悔しさはあった。

安堵もあった。

彼のことは怖くなった。

ストーカーだと思われたかな。

彼は私のことどう思ってるだろ。

マイナスにしか考えられなかった。

彼にあの時のことを聞かれたらどうしよう。

言い訳を考えるようになった。

キャッチで声をかけました。

とでも言おうか。

悩んだ。

でも彼の事が好きだ。

忘れられない。

でも怖い。

顔を見るのも怖くなった。

あんなに楽しかった日々が変化した。

彼から逃げるような日々が変わり。

月日は流れた。

彼はいなくなった。

もう会うこともないと思う。

手をつなぎたい。

ただそれだけだった。